

依空法師が東京の信者を、「仏陀との旅」にいざなう

依空法師は1月10日、東京佛光山を訪れ、120人余りの信者を「仏陀との旅」にいざないました。2500年の時空を超え、一緒にインドを「行脚」しました。

仏教発祥地のインドはカースト制度の厳しい国です。バラモン階級の人々は梵天の口から生まれ、梵天と意志の疎通ができると言われ、宗教の師としての崇高な地位を占めていました。当時、政治、経済及び各界の指導者たちはクシャトリア階級に属すとされ、仏陀もその一員でした。普通の庶民はバイシャ階級、奴隷や召使いはシュードラ階級とされていました。仏陀は出家したときにすべての俗縁を捨てました。高貴な地位だけでなく、俗世間のすべての享樂も捨てたのでした。

仏教を信仰し、偉大な教主に付き随えることは得難い因縁によるものです。依空法師は、皆さんに因縁を理解し、それを大事にし、更に縁を作りましようと呼びかけました。依空法師は仏教成立の背景を述べてから、仏教の根本精神はカースト差別を打破し、平等を提唱することだと指摘しました。それから仏陀は鹿野苑で、五人の比丘に初めて仏教の教義（法輪）を説いた史実を話しました。当時、仏陀は弟子たちに単独で各地を行脚し、平民の言語で説法するように求めました。これが「人間仏教」の始まりであると話しました。

依空法師は仏陀生涯の足跡のスライドを映し、皆さんをインド古代文明の史実探索に導きました。法師は、祇園精舎にグループを連れて、一緒に『阿彌陀経』を読んだとき、今まで迷いを抱えていた自分たちが、やっとここに戻ってきたのに、仏陀がもう存命ではないことに無念さを覚えたと話しました。また、インドの旅で、現地の多くの文化風習が目にとまったことにも触れました。無邪気なインドの子どもたちが、幼い頃から物乞いを習慣にしているのも目にしました。「善門は開き難し」で、もしその時、同情心で子どもたちに施したら、子どもたちは貪欲心を増大させ、向上心がなくなってしまうということも話しました。

「知恵ある慈悲とは教育を提供することです。それはまた、佛光山が世界各地で実行すること約束していることでもあります」。女子仏教学院、沙弥学校の創立によって、人材の乏しい（インド）仏教界に広く種を蒔いています。「仏教を再びインドに」という願いをもって、インドで黙々と（人材を）耕しているところであると依空法師は説明しました。「仏陀が成仏なさった金剛座に戻

って、その前で坐禅をすると、呼吸を仏陀の息となり、手を伸ばせばすぐ仏陀に触れられるような感じでした」という、依空法師の万感の思いを込めた感想は、その場で聞いている佛光人たちに仏陀の存在を感じさせました。

依空法師は最後に、「仏陀が存命のとき私は流転しており、仏陀が滅度した後に生まれ、この身は業障が多く、如来の金色のお姿にお会いできないことを懺悔する」という偈をもって皆さんを反省させました。更に仏陀涅槃後の金色の両足に触れ、仏教を発展させ、弘めていくことを誓願しました。